

岡山県知事賞

無駄じゃない、無駄にしない。

岡山市立高松中学校

三年生 石井愛梨

「志望校に合格できた！今までの努力が報われた。」

志望校に合格した者は皆、口を揃えて言う。では、不合格だった者はどうだろう。もちろん努力は報われてはいない。しかし、その努力に価値は無いのだろうか。その経験は無駄だったのだろうか。

私は中学受験をした。第一志望の中学校は不合格。しかし、後悔はしていない。なぜなら、その経験は確かに今に生きていくからだ。私を変えてくれたのだ。

初めて塾で授業を受けたのは小学五年生の夏だった。少し遅いスタート。自分の周りの人達が全員賢く見え、とても肩に力が入り、手に汗を握っていた。その中で疑問に思ったことを勇

気を出して、先生に尋ねてみた。すると、

「いいとこつくねえ。」

と、先生は質問に答えてくれた。すごく嬉しかった。私も一つ賢くなれたような気がした。そんな嬉しさと快感を知った私は、それから塾や学校で積極的に挙手をし、発言するようになった。

小学六年生、夏。塾で「一問一答王決定戦」が全校舎を通して行われた。教室に貼られたランキング。満点の人が目に留まった。私は、

「満点……やばっ、この人天才なん。」

と呟いた。それをたまたま聞いた先生はこう言った。

「天才じゃなくて努力や。」

と。そこで私ははっとした。今までの自分を振り返った。出された課題をこなすことで精一杯だった自分。誰もがやっていることをやっただけで満足していた自分。中学受験をすることへの謎の優越感に浸っていただけの自分。そこに、胸を張って「頑張った」と言えるほどの努力はあったのだろうか。受け身では駄目なのだ。能動的に意欲的に、与えられた一歩上を行く。そうでもないかと差をつけられないのだ。私は受験の厳しさを悟った。ただ従うだけの行動は努力ではないのだ。

中学校を受験するまでの一年半で、私の財産となったものは沢山ある。グループ面接で学んだ、聴く力、伝える力、礼儀作法、臨機応変に対応する力。作文の練習で学んだ、決められた時間内で自分の考えと体験とを結びつけて文章にする力。日々、ライバルと互いに高め励ましあったり、時にぶつかったりすることの楽しさ。広く、深く学んだ知識や解法。ここには書ききれないほどだ。

合格した第二志望の中高一貫校に通うという選択肢もあった。そのまま大学まで進学できる保証もあった。しかし、私は入学手続きを行わなかった。

受験は決して楽なものではなかった。楽しいことばかりでなく、同じくらい、いや、それを超える程の苦勞があった。眠れない夜だってあった。泣きながら問題集を解いた日も、食べ物を口にするこゝさえ億劫な日もあった。

でも、だからこそ、「無駄だった」で終わらせたくなかった。自分が満足できる「合格」を手に入れてみたかった。

「よおがんばったなあ。ええ経験になってくれりゃあそれでええ。」

と両親は声をかけてくれた。当時の担任の先生は、

「貴方ならどんな場所でも輝けますよ。」

と励ましてくれた。絶対に無駄にしないと心の中で誓った。自分の為にも、応える為にも。

今思うと、あの頃の自分には努力の量が足りなかったとわかる。甘かった。あの戦場で勝ちを取りに行く覚悟がまだ無かった。「受験生」になりきれていなかった。

しかし、あの一年半で得たものは確かに今に生きている。挙手をする 것도、大勢の前で自分の想いを話すことも好きだ。こうやって自分の体験と意見を交えて綴ることも好きだ。何事にも全力で取り組むと、見える世界が変わることも、現在進行形で感じている。

そして、受験生としての二度目の夏。私は今、受験生って楽しいなあ、そう思っている。あの頃に感じた楽しさや喜びが蘇るこの感覚がすごく心地よいのだ。

「もう受験なんてしたくない。」

「あんな地獄はもう散々だ。」

「そこまで勉強しないでも受かるから。」

受験生になれていない、ただの中学三年生だった私ならそう言っていた。「楽しい」と思えたとき、そう言う私はもういな

かった。自分に対する危機感も、受験に対する価値観も、気付かぬ間に変わっていた。

私にとって、受験はただの通過点に過ぎない。高校受験を乗り越えても、大学受験がある。そして就職活動がある。就職したその先々も、ずっと。

まだ経験も浅い、十五年しか生きていない私でも言えるのは、中学受験、高校受験、共に得たもの、これから得るものは、確かに「合格」よりも価値があるということだ。

私は受験での経験を例として挙げたが、部活、趣味、特技、人間関係など、どんなことにも共通して言えるだろう。どこかでその経験が生きるタイミングが来るのだ。しかし、それが必ずしも向こうから訪れてくれるとは限らない。生きるか無駄になるかは自分の行動次第だ。

だから、私は努力を続ける。きっとゴールは無い。次から次へと現れる壁にひたむきに立ち向かいたい。そして、私が人生を終えるとき、どう転んだとしても、

「無駄じゃなかったんだ。」

そう思える人生を歩みたい。